



## 大きなお世話

柴生田 晴四  
(経済倶楽部理事長)

▼お正月を迎えておせち料理で朝食をすませると年賀状をチェックするのが日課になっています。この歳になると新しい知己はほとんどいないので大部分は親類か古い友人ということになります。叔父叔母はもう一人しかのこっていませんし、小学生から大学までの恩師も全てお亡くなりになりました。仕事を通じての知り合いも櫛の歯が抜けるように減り、歳下の友人の計報にも接するようになりまし

た。

▼手書きの一言が添えられていなくとも、見慣れた宛名の書体を見るだけがかつての交友がよみがえってくるから不思議です。長く会わなかったとしても、一枚のはがきの向こうに確かに存在していることを確認するだけで気持ち豊かになるように感じられます。

▼ところでここ数年とても気になっていることがあります。それは長年にわたって年賀状をやり取りしてきた相手から、突然「勝手に本年を持ちまして賀状のご挨拶を遠慮させていただきます」という年賀状が届くようになったことです。何年前かに恩師の娘さんから「母の体調が悪くなり年賀状は失礼させていただきます」といった年賀状が届きまし

たが、その時は高齢の恩師を気遣いこそすれ、特に違和感を感じませんでした。しかし、今回は、その切り口上の物言いから長年の交誼を断ち切る縁切り状のようにも感じられました。中学時代から六十年にもわたって続いたきたやり取りがすべて否定されたようにも感じられるものでした。あるいは相手の家人が体調の優れぬ本人に代わって書いたものかもしれないとも思いながら、砂をかむような後味の悪さは消えません。

▼書いた人の顔が見えないとってつけた態度無礼な常套句には、どうも例文が存在するのではないかと思つて調べてみるとありました。最近はやりの「終活」の一環として「年賀状終い」を提唱する輩がいたので。なんとそ

れが一枚120円で売られているから驚きです。年賀状などというものは元々最も個人的な気持ちの発露としてのあいさつです。もちろん仕事の付き合いからくる義理だけのものもたくさんありますが、これは必要がなくなればおしまいになるだけです。「年賀状終い」の挨拶など必要がないのです。そして、個人的な知己とのやり取りも、気持ちがなくなればただやめればいいのです。決まり文句のあいさつ状など失礼以外の何物でもないと思ひます。高齢の域に達すれば人間いつこの世におさらばしてもおかしくありません。続けることが億劫になったら黙ってフェイドアウトすればいいのです。